

論 文

大学柔道選手の攻撃性の因子構造 —日常生活場面と競技場面に着目して—

前川直也¹・山本真己²・廣瀬伸良³・菅波盛雄³・中村充³

¹一般教育科_保健体育 (Liberal Arts-Physical Education, Nagaoka National College of Technology)

²順天堂大学大学院 (Graduate School of Health and Sports Science, Juntendo University)

³順天堂大学 (School of Health and Sports Science, Juntendo University)

A STUDY ON FACTOR STRUCTURE OF UNIVERSITY JUDO COMPETITORS' AGGRESSION IN THEIR DAILY LIVES AND JUDO COMPETITION

Naoya MAEKAWA¹, Masaki YAMAMOTO², Nobuyoshi HIROSE³,
Morio SUGANAMI³ and Mitsuru NAKAMURA³

Abstract

The purpose of this study is to verify university judo competitor's aggression factor. A questionnaire survey was carried out on 248 university judo competitors.

The results were as follows:

- 1) For the daily life subject, "aggression related to self-esteem", "aggression inhibition" and "autonomy", were shown as a result of the factor analysis.
- 2) For the judo competition subject, "approval of rule violating behavior and retaliatory behavior related to anger", "aggressive play style" and "avoidance of quarreling", were shown as a result of the factor analysis.

Key Words : *judo competitor, aggression, factor analysis, daily life*

1. 緒言

大学生アスリートの攻撃性は日常場面とスポーツ場面によって、時に異なった評価を受ける。大学生アスリートの日常場面における攻撃行動は、一般大学生と同様に否定的に評価されることが大半で、抑制されるべきと強く叫ばれている。実際に、欧米では大学生アスリートを対象にしたソーシャル・スキル・プログラムが実施されている¹⁾。その一方で、スポーツ場面においては、ルールで認められた相手を傷つける意図を含まない激しい行動であるアサーション (assertion) はいうまでもなく、攻撃行動で

あっても、時に勝利のための重要な要件のひとつとして、コーチやチームメイトなどから肯定的に評価されることがある。もちろん、社会的には、スポーツ場面における攻撃行動も、教育的・文化的・社会的影響力の点から看過できる程度ではなく抑制されるべきと強く批判され、対策が求められている²⁾³⁾⁴⁾。実際、国際スポーツ心理学会⁵⁾では、アスリートはもちろん観衆や聴衆を含めた関係者すべてが競技スポーツにおける暴力を減らすように勧告している。また、暴力を抑制し、目標達成のための闘志あふれる行動を適切に使うためのガイドラインが提案されている²⁾⁶⁾⁷⁾。こうしたプログラムや勧告・ガイドラ

インは欧米を中心に行われてきたアスリートを対象とした攻撃性研究の知見に基づいていると推察される。

これまでのアスリートを対象にした攻撃性研究は、主に情動発散説の立場からスポーツ活動によるカタルシス効果に焦点がおかれて、2つの相反する知見が提出されてきた。一方は、スポーツ活動が攻撃性の健全な捌け口となり、攻撃性の低減に寄与するというカタルシスを支持するものである⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。他方は、スポーツ活動場面で具体的な攻撃行動を学習したり強化するために、攻撃性が増大するというカタルシスを支持しないものである¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾。これは、理論的には社会的学習理論により説明が可能である。これまでの知見を総括すると、スポーツ活動が日常生活での攻撃性を明らかに低減させていることを証明した研究は少なく、むしろ攻撃性を増大させているとする研究が多い。しかしながら、スポーツ活動での攻撃性に関する社会的学習理論に基づく実証的な研究は少なく十分な検証が行われていない¹⁵⁾。さらに、これまでの研究の多くは、スポーツと攻撃性の関連に終始しており、アスリートの攻撃性を構造的に明らかにする研究ではない。そのため、彼らの攻撃性についての適切な理解と対応のための知見としては不十分であるといわざるをえない。

そのなかで、武道に焦点をあてた多数の研究においては異なる結果が報告されている。Danielsら¹⁶⁾は、武道の敵意は稽古を積んだ期間の長さによって低減されるとし、その主な要因として武道における修練によって鍛えられる精神を挙げている。Lamarreら¹⁷⁾は、柔道家の性格特性としての攻撃性は稽古を積んだ期間や年齢に伴って低減されていくという結果を報告している。

Kornadt¹⁸⁾の動機理論では、攻撃性は単純な特性としてではなく、2つの動機の要素を含んだ複雑な体系として扱われる。ひとつは攻撃行動への接近要素である攻撃動機 (aggression motive) で、これは第一に意図された目標、すなわち誰かを傷つけること、人の資産の暴力的略奪によって定義され、もうひとつは攻撃行動への回避要素である攻撃抑制 (aggression inhibition) で、これは攻撃を回避しようとする目標によって定義され、攻撃の結果から起こる報復の恐れや、攻撃の実行にいたるまでの道徳的体系からおこる罪悪感と関わる¹⁹⁾と述べている。こうしたことから、競技場面に存在するさまざまな状況的条件との相互作用により、選手個人の動機体系のなかにスポーツ競技場面に特有な目標をもつ攻撃動機および攻撃抑制が形成され、組み込まれ

ていると考えられる¹⁹⁾。攻撃性の発揮はその状況下によって大きく異なるものと解釈され、多面的に攻撃性について調査する必要がある¹⁹⁾。

そのなかでも、武道における攻撃性は、対人競技ゆえに競技場面においては、勝利を導くうえで、重要な鍵を握っており、必要不可欠な要素といえる。

そこで、本研究では、大学柔道選手の攻撃性に焦点をあて、日常生活場面および競技場面での攻撃性の因子構造を明らかにすることを本研究の目的とした。

2. 研究方法

2007年6月～7月に全日本学生柔道連盟に所属する大学生411名 (男子323名、女子88名) に攻撃性に関するアンケート調査を行った。調査項目は、日常場面における攻撃性として、Kornadt¹⁸⁾のSaabruken Aggression Scale (日本語版; SAS質問紙) の52項目のうち、因子負荷量、共通性および項目の内容を吟味し、最終的に32項目を用いた。また、競技場面における攻撃性に関する項目は、佐藤ら¹⁹⁾の剣道における攻撃性質問紙の28項目のうち、柔道競技にあてはまらない項目については削除し、柔道競技においてもあてはまる項目についてはそのまま採用した。また、語句が妥当ではないと判断した項目については、柔道の競技場面に適するよう一部修正を加えた。有効回答数は、総計248名、平均年齢19.7±1.19歳 (男子176名、女子72名) で60.3%であった。なお、統計処理にはMicrosoft Excel・エクセル統計2006を使用した。統計学的危険率は5%以下 ($p<0.05$) とした。

3. 結果および考察

3. 1 日常生活における攻撃性

調査を実施した248名のデータを用い、Varimax法による直交回転を行い、主因子法により因子分析を行った。この結果抽出された17因子のうち解釈可能性が高いと思われる固有値1.0以上の4因子を認めた。この4因子は全分散の31.6%を説明しており、因子の解釈および命名には因子負荷量が0.400以上 (絶対値) の項目をリストアップして行った (表1)。

因子Iに高い負荷量を示した項目からは、先行研究¹⁹⁾²⁰⁾と同様に、自分がいつも周囲から馬鹿にされ

ているのではないかという他者に対する一般化された不信感や自己防衛的な構えを表した。そこで、この因子を「自尊心に関わる攻撃」と命名した。

因子Ⅱに高い負荷量を示した項目からは、前述の先行研究¹⁹⁾²⁰⁾と同様、怒りや攻撃行動を表出した後での後悔あるいは否定的な感情や他者と争うことを避けてできるだけ話し合いや譲り合いを重要とする態度を表している。そこで、この因子を「攻撃抑制

と命名した。

因子Ⅲに高い負荷量を示した項目からは、自分自身で考え行動をしていることが共通しているものと解釈できる。そこで、この因子を「自律」と命名した。

因子Ⅳに高い負荷量を示した項目からは、前述の先行研究¹⁹⁾²⁰⁾と同様、強い個人的志向性を表す内容であった。そこで、この因子を「自己主張性」と命

表-1 大学柔道選手の日常生活における攻撃性の因子構造

質問NO.	質問内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
Q27	もし何かが私の思うようにならないと、私はすぐ腹を立てる	0.613	0.002	0.141	0.196
Q25	もし誰かが運悪く失敗すると、どこかに必ずそれを喜ぶ人がいる	0.591	0.171	-0.118	0.140
Q24	私はよく他の人たちから不当な待遇を受けていると思う	0.560	-0.103	0.414	-0.188
Q18	ある人々は人の邪魔をし、人を妨害するのを楽しみにしている	0.553	0.162	0.077	0.033
Q33	私はほとんど毎日のように、人々が自分達の目的を果たすために、他の人を無視しているのを見る	0.551	0.040	0.311	-0.074
Q7	もし誰かが私の行動を批判すると、私は非難されたような気持ちになる	0.549	0.183	-0.033	0.075
Q32	後ろで誰かの笑い声が聞こえると、その人は私をバカにして笑っているのではないかと感じる	0.547	0.097	0.196	-0.114
Q8	時折、私の腹は煮えくり返る	0.481	-0.049	0.102	0.003
Q26	もし誰かが私に不当なことをすると、私はその人を問いただす	0.458	0.137	0.034	0.204
Q6	人に攻撃されるよりも、人を攻撃する側にまわる方が良い	0.440	-0.191	0.107	0.278
Q15	他の人たちは、私を怒らせるためにわざと私に反対しているのだという事を、私はちゃんと知っている	0.420	0.047	0.481	-0.127
Q16	人の気持ちを傷つけないようにと、私は気をつけている	-0.074	0.642	0.071	0.091
Q13	私は何か間違ったことをすると、いつも良心との葛藤により悩む	0.130	0.591	0.088	0.187
Q11	もし誰かが私におかしな態度を示したり、親切でなかったりすると、私は自分の側に間違いはなかったかと、反省してみる	-0.044	0.590	0.050	0.140
Q17	私は自分の意見を言う前に、もし私がこう言ったら、他の人はどう思うだろうかと考えてみる	0.036	0.543	0.060	0.073
Q12	人々はたいてい互いに傷つけ合いたくないと願っているが、もし万一傷つけ合うような事があると、それを後悔する	0.050	0.527	-0.010	0.178
Q5	もし争いにまき込まれるようなことがあると、私はそのために苦しんだり悩んだりする	0.246	0.440	0.191	-0.031
Q4	私は人から援助を受けるのが嫌いだ	0.115	-0.005	0.499	0.169
Q3	自分だけを頼りにしていると、間違いはないし良い	0.310	-0.115	0.459	0.219
Q20	誰かが自分の意見を通そうとしているのを見ると、私はたまらなく反対したくなる	0.372	-0.149	0.435	0.164
Q22	もし誰かが私を傷つけた時には、その人が本当に私を傷つけようと思ったかどうか考えてみる	0.071	0.326	0.420	0.015
Q29	私は一度こうしようと決心したら、人がいくら何を言おうと、そうたやすく決心は変わらない	-0.003	0.120	0.375	0.551
Q10	他の人がどう思おうと、私は自分が正しいと信じたことをする	0.189	0.110	0.230	0.500
Q19	私は人から言われなくても、自分のすることくらい自分で決める	0.013	0.281	-0.008	0.488
Q30	私は人の言いなりにはならないし、人に利用されたりはしない	0.089	0.213	0.026	0.411
累積寄与率		11.91%	20.16%	26.91%	31.61%

名した。

3. 2 競技場面における攻撃性

調査を実施した 246 名のデータを用い、Varimax 法による直交回転を行い、主因子法による因子分析を行った。この結果抽出された 14 因子のうち解釈可能性が高いと思われる固有値 1.0 以上の 4 因子を認めた。この 4 因子は全分散の 34.4%を説明しており、因子の解釈および命名には因子負荷量が 0.400 以上 (絶対値) の項目をリストアップして行った (表 2)。

因子 I に高い負荷量を示した項目から、不正なプレイでも勝つためには必要であるなどの攻撃的な意見や信条が含まれていると解釈され、また、自分や味方の選手に向けられた相手選手による不当なプレ

イに対する怒りや報復の意図が含まれていると解釈される¹⁹⁾。これは、剣道における先行研究で佐藤ら¹⁹⁾によって、それぞれ「ルール違反の許容」、「怒りに伴う報復行動」と命名されていることから、この因子を「ルール違反の許容・怒りに伴う報復行動」と命名した。

因子 II に高い負荷量を示した項目から、先行研究¹⁹⁾と同様に、自分のプレイのスタイルがどれほどラフで攻撃的であるか、周囲の他者にどれほどの脅威を与えているかについての自己認知が含まれているため、この因子を「攻撃的なプレイスタイル」と命名した。

因子 III に高い負荷量を示した項目から、先行研究¹⁹⁾と同様に、衝動的攻撃の抑制と相手の危害に対する気遣いを示すものであった。そこで、この因子を「争いごとの回避」と命名した。

表-2 大学柔道選手の競技場面における攻撃性の因子構造

質問No.	質問内容	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
Q7	私は、競技中、自分がかつとなりやすい人間だと思う	0.669	0.044	0.016	0.180
Q9	私は相手にやられたら、それ以上にしてやりかえさないと気が済	0.646	0.074	-0.109	0.233
Q4	競技中、私は憎らしいと思った相手選手を、叩きのめしたくなる	0.630	0.079	0.044	0.209
Q25	相手がある				
Q25	相手が不当なプレイをしてきたら、私はすぐかっとなって、手が出	0.537	0.299	0.158	0.013
Q8	そうになる				
Q8	不正なプレイでも、勝つためには必要なときがある	0.522	0.252	0.093	-0.034
Q12	審判が反則をとらなければ、ラフなプレイをしても良い	0.498	0.318	0.205	-0.102
Q19	相手選手が怪我をしていたら、私はその部分を狙う	0.431	0.266	0.200	-0.185
Q24	私の激しい立技や寝技は、味方の選手も恐れるほどである	0.049	0.718	0.155	0.043
Q14	私は、競技中に相手が「待て」をかけた直後でも、わざと技を掛け	0.313	0.565	0.177	-0.149
Q18	たことがある				
Q18	私は激しい組手や足払などで、相手選手を脅かす	0.110	0.514	0.200	0.042
Q11	私は普段はおとなしいが、競技中は人が変わったように、激しい	0.305	0.490	0.132	0.138
Q11	プレイをする				
Q3	私は絞技で相手が「参った」を宣告しても、わざと放さなかったこと	0.386	0.481	0.015	-0.061
Q1	がある				
Q1	まわりの人は私に、荒っぽいプレイを期待している	0.143	0.449	0.080	0.099
Q16	競技中、喧嘩になるよりも、私は他人の言うことをおとなしく聞く	-0.083	0.320	0.553	-0.045
Q27	競技中、私は相手に必要以上にダメージを与えないようにしてい	-0.049	0.337	0.521	-0.090
Q17	る				
Q17	私は、自分より大きくて強そうな相手の選手が攻めてくると、つい	0.265	-0.064	0.514	-0.293
Q28	弱気になってしまう				
Q28	相手選手から脇固をかけられたり、強烈に奥襟をたたかれたりす	0.118	-0.008	0.507	-0.128
Q6	ると、それ以後その選手をなるべく避けたい				
Q6	競技中、私は相手とのトラブルをどんなことがあっても避けるよう	0.108	0.138	0.499	0.053
Q22	にしている				
Q22	競技中、たとえ自分のほうが正しいと思っても、相手と喧嘩するよ	-0.180	-0.063	0.468	0.371
Q3	うなことはしない				
Q3	競技中、相手に怪我をさせられるのではないかと、不安になるこ	0.089	0.188	0.447	0.031
Q10	とがある				
Q10	私は相手から技や関節技をかけられるのが恐ろしい	0.277	0.063	0.414	-0.039
Q21	勝つためとはいえ、相手をひどく怪我させるプレイをすべきではな	-0.225	-0.265	0.274	0.646
Q13	い				
Q13	味方の選手が、相手にひどくやられるのを見ると、私はその選手	0.191	0.200	0.017	0.446
	の仇をとってやりたくなる				
	累積寄与率	17.89%	25.73%	30.67%	34.38%

因子IVに高い負荷量を示した項目は、「勝つためには、相手をひどく怪我させるプレイとすべきではない(=0.646)」と「味方の選手が、相手にひどくやられるのを見ると、私はその選手の仇をとってやりたくなる(=0.446)」であった。前者の質問項目は逆転項目であるため、正の負荷量を示していることは、この両者は相反する質問項目と解釈される。前者は、因子IIIの「争いごとの回避」に包括されるものであると解釈され、後者は、因子Iの「ルール違反の許容・怒りに伴う報復行動」に包括されると解釈される。これらは、全く相反する質問項目であり、解釈することは困難であるため、この因子IVは解釈不可能とした。

3. 3 男女による比較

日常生活における攻撃性の因子構造については、因子分析によって抽出された4因子について、男女比較をt検定によって検定を行ったところ、「自律」において女子よりも男子のほうが5%水準で有意に高かった($t=2.304$, 自由度=246)。これは、藤本ら²¹⁾の研究のなかで、男子よりも女子のほうが柔道の開始理由は有意に外的誘因が強いこと、辞めたい理由を女子のほうが人間関係を理由にしている傾向が高いこと、辞めたい理由から克服においても男子よりも女子のほうが外的な助言や指導によって有意に克服していると報告していることと同様に、女子は人間関係を重視するあまりに自律度が低いことが推察される。

競技場面における攻撃性については、因子分析によって抽出された3因子について、男女比較の検定を行ったところ、「攻撃的なプレイスタイル」において、女子よりも男子のほうが1%水準で有意に高かった($t=3.076$, 自由度=244)。これは、先行研究²²⁾で高校生柔道選手の精神構造を因子分析によって抽出した結果、男子は「課題克服」因子が抽出されたのに対し、女子は「競技愛好」の因子が抽出されている。このため、競技場面において、男子は選手個々が課題克服に真摯に取り組んでいるのに対し、女子は前述の研究²¹⁾から人間関係を重視し、競技そのものを愛好する傾向が強いと推察される。

以上のことから、男子選手は勝負に対する執着心から日常生活および競技場面で攻撃性がみられることが予測できるのに対し、女子選手は、失敗不安が強く、それを回避するために日常生活および競技場面で攻撃性がみられることが推察された²³⁾。

4. まとめ

2007年6月～7月に全日本学生柔道連盟に所属する大学生248名(男子176名, 女子72名)に攻撃性に関するアンケート調査を行い、大学柔道選手の日常生活場面および競技場面で攻撃性の構造を明らかにすることを試みた。

その結果、日常生活場面における攻撃性については、「自尊心に関わる攻撃」、「攻撃抑制」、「自律」、「自己主張性」の4因子を抽出した。競技場面における攻撃性については、「ルール違反の許容・怒りに伴う報復行動」、「攻撃的なプレイスタイル」、「争いごとの回避」の3因子を抽出した。

また、日常生活場面における攻撃性の「自律」において5%水準で有意に男子のほうが高かった。さらに、競技場面における攻撃性の「攻撃的なプレイスタイル」において1%水準で有意に男子のほうが高かった。

5. 今後の課題

本研究における尺度の累積寄与率は高いものではなかった。これは、因子によっては攻撃性ではないものをとらえているためと考えられる。ゆえに、本研究において、柔道選手の攻撃性の因子構造を把握することは難しい。したがって、今後は柔道選手の攻撃性を把握するために新たな尺度を開発する必要があると考えられる。

文献

- 1) 田中純夫, 山田泰行, 杉浦幸, 西泰信, 水野基樹: 大学生アスリートにおける攻撃性と逸脱行動I, 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, pp146, 2007.
- 2) Anshel, M.H.: Sport Psychology. Gorsuch Scarisbrick, Publishers Arizona, pp153-172, 1997.
- 3) Coakley, J. Sports in Society: Issues & Controversies. McGraw-Hill, New York, pp200-233, 2003.
- 4) Leonard, W.M.: A Sociological Perspective of Sport. Allyn and Bacon: Boston, pp160-172, 1998.
- 5) Tenenbaum, G., Stewart, E., Singer, R.N., and

- Duda,J.: Aggression and Violence in Sport. An ISSP Position Stand, ISSP Nesletter 1, pp14-17, 1997.
- 6) Jarvis,M. : Sport Psychology, Routledge New York, pp45-61, 1999.
- 7) Silva,J. : Understanding Aggressive Behavior and Its Effects upon Athletic Performance. In Straub,W.F.(Ed.), *Sport Psychology : An Analysis of Athlete Behavior*. Movement. New York, pp176-186, 1980.
- 8) Husman,B.F. : Aggression in boxers and wreslers as measured by projective techniques. *Research Quarterly*, 26, pp421 - 425, 1955.
- 9) Johnson,W.R. & Hutton,D.H : Effects of a combative sport on personality dynamics as measured by a projective test. *Research Quarterly*, 26, pp49 - 53, 1955.
- 10) Martin,L : Effect of competition upon the aggressive responses to college basketball players and wrestlers. *Research Quarterly*, 47, pp388 - 393, 1976.
- 11) Mugno,D.A., and Feltz,D.L. : The Social Learning of Aggression in Youth Football in United States. *Canadian Journal of Applied Sport Sciences*, 10, pp26-35, 1985.
- 12) Shields,D., and Bredemeier,B. : Character Development and Physical Activity. Human Kinetics, Champaign, IL, 1995.
- 13) Silva,J. : The Perceived Legitimacy of Rule Violating Behavior in Sport, *Journal of Sport Psychology*, 5, pp438-448, 1983.
- 14) Stephens,D.E. : Aggression. In Duda,J.L.(Ed.) *Advances in Sport and Exercise Psychology Measurement, Fitness Information Technology, Morgantown*, pp277 - 292, 1998.
- 15) 青木邦男・松本耕二 : 高校運動部員の攻撃性とそれに関する要因. 山口県立大学社会福祉学部 紀要, 第12号, pp1-15, 2006.
- 16) Daniels,K., and Thornton,E. : An Analysis of the Relationship Between Hostility and Training in the Martial Arts. *Journal of Sport Science*, 8, pp132-133, 1990.
- 17) Lamarre BW, Nosanchuk TA: Judo—the gentle way: a replication of studies on martial arts and aggression. 1999 Jun; 88 (3 Pt 1): 992-6
- 18) Kornadt H.-J.: Aggressivmotiv und Aggressionshemmung. Bern : Hans Huber, 1982.
- 19) 佐藤成明, 長谷川悦示, 市村操一 : ラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性, 筑波大学体育科学系紀要14, pp65-77, 1991.
- 20) Yamauchi.H: Children rearing and aggression in Japanese adolescents. Aggressiveness and its developmental conditions in five cultures (Symposia), the 10th IACCP Congress, Nara, Japan, 1990.
- 21) 藤本誠, 渡辺直勇, 渡辺涼子, 西田孝宏, 山部伸敏, 大谷崇正, 岸邦彦, 前川直也 : 柔道競技の契機と継続に関する調査研究 (1) —大学生を対象とした男女間の比較調査—, 武道学研究第41巻別冊, 日本武道学会第41回大会研究発表抄録, p17, 2008.
- 22) 前川直也, 緒方和男, 江田茂行, 菅波盛雄, 廣瀬伸良, 中村充, 渡辺直勇, 渡辺涼子, 藤本誠, 鈴木貴士, 坂本道人, 金丸雄介 : 「高校柔道選手の世界観」, 新潟県体育学会平成20年度大会, 2008.
- 23) 前川直也, 江田茂行, 山本真己, 菅波盛雄, 廣瀬伸良, 中村充 : 大学柔道選手の攻撃性に関する研究, 武道学研究第41巻別冊, 日本武道学会第41回大会研究発表抄録, p1, 2008.

(2009. 1. 20 受付)